会　　議　　録

会　　議　　名	第３２期小金井市公民館運営審議会第１２回審議会 （平成２６年度三者合同会議（研修会））		
事　　務　　局	公民館運営審議会（公民館）		
開　催　日　時	平成２６年１１月１４日（金）午後３時から５時		
開　催　場　所	市役所第二庁舎８階８０１会議室		
出　席　委　員 （１６名） ※石田委員は２つの委員を兼ねる	＜公民館運営審議会委員＞ 藤井委員長　亘理委員　小島委員　山田委員　宮澤委員 ＜図書館協議会委員＞ 田中委員長　藤森委員　宮澤委員　石田委員　中里委員　則武委員 吉田委員 ＜社会教育委員＞ 中村議長　本多委員　石田委員　原嶋委員　小山田委員		
事　務　局　員	前島公民館長　上石図書館長　石原生涯学習課長 山﨑公民館庶務係長　若藤公民館事業係長　西村図書館庶務係長 伊東生涯学習課主事		
傍 聴 の 可 否	可	傍 聴 者 数	０名
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由			
会　議　次　第	１　研修会 ⑴　講演「地域住民として、子ども達とどう向き合うか ～現代の子ども達が抱える諸問題、ＳＮＳ・ニート etc～」 講師 東京学芸大こども未来研究所理事兼主任研究員 小山田　佳代　氏 ⑵ グループ討議（司会、発表者を決定） ⑶ 質疑応答 ２　報告事項 社会教育委員の会議議長　中村　彰宏　氏 ３　次回日程について 次回担当委員会　図書館協議会所管課　図書館 平成２７年５月２１日（木）午後２時～ 於：市役所第二庁舎８階８０１会議室 ４　配付資料 ⑴　講義資料 ⑵　第二次生涯学習計画の評価についてのアンケート回答（写）		

会　議　結　果

藤井委員長　公民館運営審議会委員長の藤井です。今年度の三者合同会議等の担当委員会となっておりますので、本日の司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

平成２６年度三者合同会議を始めたいと思います。本日の内容は、お手元の書類にあるテーマで、私達が「地域住民として子ども達とどう向き合うか」、重要であり、興味深いテーマです。キーワードはスマートフォン、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（ＳＮＳ）でないかと私は思っております。子ども達は、私達の時代にはなかった現代の魔法のツールを自由に使いこなしております。このような状況の中で、子ども達がどのような影響を受けていくのかについて学習していくことで、現代の状況をご理解願えればと思っております。

今日の講師は、社会教育委員でもあり、ＮＰＯ法人東京学芸大学こども未来研究所理事兼研究員でもある小山田佳代さんにお願いしたいと思います。先生の講義、質疑応答、発表、約１００分ほどの長丁場になりますが、よろしくお願いいたします。

１　研修会

⑴　講演「地域住民として、子ども達とどう向き合うか
～現代の子ども達が抱える諸問題、ＳＮＳ・ニート etc～」

小山田講師　今ご紹介いただきました、社会教育委員でもあり、ＮＰＯ法人東京学芸大学こども未来研究所理事兼研究員をしております小山田です。どうぞよろしくお願いいたします。では、ちょっと座らせていただきます。失礼します。

今日は「地域住民として、子ども達とどう向き合うか～現代の子ども達が抱える諸問題、ＳＮＳ・ニート etc～」というお題をいただきまして、ご関心のあるところだと思うんですけれども、これから５０分ぐらいお話をして、その後、休憩を挟んで、各グループでまた皆様とお話もしていただければと思っております。

まず私のお話なんですが、今、ＳＮＳ、ニートという、こういった単語でいくと皆様よくご存じだと思うんですけれども、子ども達が今どのような背景にあるかというところをお話しできたらと思います。

お手元の資料を見ていただけますでしょうか。今の子ども達はどういった感じなのかというところです。これは第２回ベネッセ子ども生活実態基本調査からの引用ですけれども、お手元の資料のグラフは見えにくいかと思うので、こちらのほうもちょっと見ていただければと思います。小学校、中学校、そして高校生ということでとっておりますが、見ますと、上が「とても満足している」で、下が「まあ満足している」というラインになるんですけれども、家族との関係とか友だちの関係というのはどの小中高もわりと満足されているんです。ここで一番問題というか、課題になるのは、自分に対して全然満足していないんですね。小学生はまだ半分ぐらい、中学生で４割ぐらいで、自分の性格ですとか自

分の成績に関しては、もう高校生なんて２割も満足していないという、自尊感情の弱さが顕著にあらわれていると思います。あと、今の日本の社会に対しても、満足しているというのは２割、３割程度です。子ども達もそう思っているということなんですね。

これは今度、国際的な比較調査になります。今、自尊感情が非常に弱いということだったんですけれども、じゃ、ドイツ、イギリス、フランス、韓国、日本の５カ国で比較してみるとどうかといいますと、一番左のラインが「とてもあてはまる」で、オレンジが「ややあてはまる」、次の「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」でいきますと、日本はみんな本当に、自分のことが好きであるかという問いにもあてはまらないんです。ドイツとかイギリスのほうはかなり皆さん自分にも自信を持っているという傾向があるんですね。

続いて、今度、友だちの数としてはどうかといいますと、友だちの数は、見ていただきますと大体、大勢、１１人以上というのはあまり少ない感じなんですけれども、４人から１０人ぐらいというのが半分ぐらいです。「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」も結構いるんですよね。「悩みごとを相談できる友だち」というのも、わりとこの数字でいくとみんないますね。４人から１０人の中で大体いることはいるんですね。

続きまして、友だちとの関わりについてもう少し見ますと、「友だちといつも一緒にいたい」というのが、男子のほうが実は２００４年と比べて増えているんですね。また、「違う意見をもった人とも仲よくできる」という人も増えているんです。女子のほうも増えているんですが、男子のほうが実は友だちといつも一緒にいて、違う意見を持った人ともすごく仲よくできる。また、「グループの仲間同士で固まっていたい」「仲間はずれにされないように話を合わせる」というのが、男子のほうが増えているんですね。「友だちが悪いことをしたときに注意する」というのも、男子よりも女子のほうが注意したり、そういった数字ですね。小学生全体ですと、「友だちが悪いことをしたときに注意する」は６５％、「グループの仲間同士で固まっていたい」というのが５２％ぐらいあるんですが、これで全体的なところで何が読み取れるかといいますと、要は、男子が、みんなと一緒にして、いつも仲よくして固まっていたいという。右下に書いてありますが、「おとなしく群れる」＝草食系男子像というのがここでもちょっとあらわれてはいるんですね。

友だちとの関わりというところも見ていただきますと、「友だちといつも一緒にいたい」「違う意見をもった人とも仲よくできる」というところでいきますと、やはり主体性の弱さというのが非常に顕著にあらわれます。

なので、わりとみんな、じゃ、満足しているのかなと思うんですが、実はその満足度というのが低いんですね。自分が満足する部分というのはとても低く設定されていまして、そこに達すれば満足を得ているとい

うような、やはり自分自身のモチベーションというか、非常に低いところで自分の満足度を設定しているという傾向にあります。

今、集団の変化というところでも、どんどん小さい輪になっていまして、「島宇宙化」で、学級の中でも分断されるとともに、「序列化」というのも実は始まっていたりします。これはここに書いてありますが、勉強ができる、できないということではなく、上位というところが、見た目ですとかファッションセンスとか、場の空気が読めるとか読めないとか、部活だったり趣味とか、そういったようなことで上位、下位みたいな序列化をしていたりします。

「スクールカースト」といった言葉も今、出てきております。学校の中で相対評価を廃止するということで、序列づけも否定するような、平等主義というところから、学業成績や運動能力というようなことでの特性のアイデンティティを失ってしまって、コミュニケーション能力というところで格付けをしていくというようなことが起こっているわけなんです。スクールカーストというものについては、ちょっと前にテレビでも米倉涼子さんが三十何歳で学校に入るというドラマがあったんですけれども、そのドラマがまさにそういったことを題材にしたドラマで、学校の中でもカースト制度みたいな、階層化というようなものが始まっています。これはもちろん地域差がかなりありますので、小金井ではそんなにしないような気はしているんですけれども、そういったような学校の中でも子ども達のカーストというのが始まったりしているということです。

特徴としてはこんな感じですね。一軍、二軍、三軍、Ａ、Ｂ、Ｃなどというようなことで、これが過剰になってくると、いじめのような関係になってきますし、そういった要因になっていくということが行われているということも学校の中ではあるということです。

今言ったように、まず自分には自信が持てなく、自尊心がやや弱くなっている中で、学校の中でみんなと一緒に、自分の主体性を押し殺して仲よくしていく。でも、自己主張をあまりしない。下手したら、カーストで序列化があって、自分が下になったら大変だから、やはり周りの目を気にして、みんなとどうやって仲よくやっていけばいいだろうというような感じで過ごしている若者達というか、小中高ぐらいですけれども、いるわけなんですね。

それで、次に、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの話に入るんですけれども、そういった背景の中で若者達がソーシャル・ネットワーキング・サービスのほうに没頭していくという、ちょっとその気持ちというのが、今の前半の話を聞いていただくと、何かわからないでもないような気がいたしませんでしょうか。インターネットの普及というのがここにありますが、今もう１０人に８人ぐらいはインターネットを利用しています。スマホでできることって、たくさんございますが、わりと今メジャーなのが、Facebook ですね。皆さんもやっていらっしゃるかなと思うんですけど、これは２００４年に誕生したんですが、世界では

もう１２億人ぐらいが利用していまして、実名登録プロフィールが公開されて、不特定多数へ発信するものなんですね。Twitter というのは、つぶやきと言われるもので、２００６年にスタートしたんですが、今は１日当たりの投稿が、世界ですけど、５億件以上もつぶやかれているというものです。これは本当につぶやきで、気軽にいろんな人とつながっていけるということなので、本当にスマホで打って、ぴゅっとなったら、つぶやきとかいう感じで出るわけなので、いろんな人と登録したり、友だちだったりしてというような感じでどんどん広げることができるという感じですね。それで、わりと最近登場したけど、今非常に人気なのがＬＩＮＥというもので、２０１１年に誕生して、今はもう世界で４億人以上、国内では５，０００万人ぐらいが利用しております。特に１０代から２０代のユーザーが非常に多くて、これは One To One のコミュニケーションツールで、電話とかメールでやるよりも、みんなＬＩＮＥに入って、ＬＩＮＥ同士でつながったり、ＬＩＮＥもグループとかもできるので、今、携帯ですと、メールよりもみんなＬＩＮＥでやりとりしているんじゃないかなというところで、これはスタンプがあって、それがまた人気で、いろんなスタンプがあって、買ったりするようなスタンプもあったりして、そういうのもみんな若い人達の中では人気で、非常に急激に伸びています。オンラインゲームは、ネットにつながりながらゲームができて、今、無料のオンラインゲームというのが非常にたくさんございまして、そういったものも結構利用して、無料なのでどんどんそういったものにはまっていっちゃうという傾向があるということです。

数的にどんな感じかなというところなんですけれども、ネットを使用している時間というのは、中学生と高校生ということでありましても、大体高校生は１時間から３時間という人が多くて、３時間以上という人も結構いますね。中学生になると、まだ１時間未満という子達も多いので、１時間から３時間ぐらいが少ないんですけど、高校になると急に増えていますね。あと、ネット依存という。ネットを使い過ぎて依存症みたいになっているという現象も実は起こっているわけなんです。これは本当に使い過ぎて、健康問題や社会問題、家族問題などを引き起こすぐらいになっている依存症という若者達も今、出ています。男子と女子とだったらどっちがというと、女子のほうが結構傾向としては強いかなという感じなんですけれども。

どういったようなことかといいますと、例えば、これは国立病院機構の久里浜医療センターの樋口先生の手記なんですけれども、事例として、「Ａ君は中学受験を経て、私立の中高一貫校に入学をしました。明るい性格で、中学校ではクラスのリーダー的存在でした。クラスの友人に誘われて、中２から多人数参加型のオンラインゲームを始めました。しかし、このころは午後１１時ごろには家族の就寝に合わせてゲームをやめていました。高校に進学し、１年の３月に小遣いで自分のパソコン

を購入してからエスカレートし、ネットゲームが深夜に及ぶため、学校の遅刻や欠席が始まりました。２年の夏休みには全くの昼夜逆転状況になり、午後から明け方まではゲームをする生活となりました。ゲームをしているときは食事も疎かで、お風呂にもほとんど入りません。ネットゲームを家族が注意すると、目をつり上げて暴言を吐き、強引にネットを切断すると大暴れするという状態で、家族は腫れ物に触るようにしています。高２の夏休み以降は部屋にひきこもって１日１０時間から１４時間ネットゲームを続けています。学校は退学となり、サポート校に入学したものの、そこにもほとんど行けていません。」ということで、そのクリニックにご両親が連れていらっしゃったというような事例なんです。

本当に依存で使い過ぎてしまうと、そこまで行ってしまうという。でも、それはもう、いつそこまでなってしまうかもわからないような要因はあるかとは思うんですね。大体、男子に多いんですけれども、男子のほうはやはりゲームのほうにはまっていまして、ネットサービスの中では、男子はロールプレイングゲームやシューティングゲームというようなゲームを結構やっております。スマートフォンでもできてしまうので、家でパソコンを買っていなくてもスマートフォンがあればそれでもできてしまうということで、また今、急激に使い過ぎという人達は増えているというような状況ですね。

本当に便利なツールではあるんですけれども、身近にそういったものがあるということはあるわけなんですね。学齢別に見た中では、やっぱり高校生が非常に多いんです。高校生が結構依存率というのが多いです。次に、中学生ですかね。中学生、高校生あたりがちょっとやはりネット系のほうに依存する傾向がかなりあるということです。

この動機ということが、ちょっと最初に言いました全体の今の若者達の様子の中から酌み取れる部分はあるんですけれども、孤独感が癒され、自分の心情や考えを多くの人に本当はしてもらいたいんだけれども、リアルな仲間の中ではそれを出すのがすごく心配なわけなんですよね。

なので、そういったネットのようなところでつながりを求めて、つながりというのは、やっぱりみんな誰かとつながりたいし、つながることで自分自身も確かめたいという、そういった心情があって誰かとつながりたい。また、いろんな日々のストレスを解消するということで、

Facebook とか Twitter ではつぶやいたものがそれこそ全世界とかにもいるわけなので、今、ネットの後ろには私の友だちは何万人いますみたいな、結構そういったコマーシャルもやっていますけれども、そういったところでの友だちづくりみたいなところに若者達が関心を持っているというか、そちらのほうに行っているということなんですね。

また、悪いほうでいけば、アクセスして、今みんな、やりとりはＬＩＮＥとかでやっているんですよね。なので、そこに入っていないと仲間はずれにされるという、そういったようなこともあるので、別に自分はやりたくないなと思っても、お友だちがみんなそれに入っていて、みん

なそれでやりとりをしているんだと言うと、そこに入らざるを得ないというような状況もあるということもございます。

本当はインターネットはあくまでもツールであって、そこを介して広がる人間関係とか、情報とかは本当にいろんな情報があるので、今まで調べるのも大変だったような、図書館とかに行って調べなければわからなかったようなことも、ネットとかで本当にいろんな情報も得られますし、あと、ゲームとか動画もすごくきれいですよね。すごいきれいなので、興味を持って、いい方向で使えば非常に便利なツールです。

何事も正と負の二面があるんですが、負のほうの利用を考えてしまうと、何か内にこもったところの、ただのはけ口みたいなことだけでつながりを求めて使うとなると、ちょっと心配な部分が出てくるということはあると思います。

ですから、便利だというツールの方向に大人達がそういうふうに持っていくということが必要じゃないかとは思うんです。今の問題をまとめますと、ネットに依存し過ぎますと、睡眠、覚醒の問題や、さっきもありました、御飯を食べなくなってしまってということで栄養失調、逆に全然動かなくて、食べて家の中にいるので、メタボや、骨が脆くなったり、体力も低下したり、あと、勉強しなくなってしまって、成績が低下したり、遅刻や欠席が増えたり、またちょっとネットゲームの課金とかそういうことでお家のお母さんのお金をちょっと拝借みたいなことがあって、金銭問題が出てきたり、補導があったりというような、そういった問題までも発展していく。そういった要因はあります。なので、不登校とかひきこもりというのも今非常に増えていますけれども、全てがネットのせいではないと思いますけれども、そういう要因にもかなりつながっていくということはございます。

もう一つの「ニート」というものですね。ニートということをご説明いたしますと、ニートという言葉が実はイギリスで発祥しております。ただ、イギリスでは、教育、雇用、職業訓練のいずれにも参加していない１６歳から１８歳の若者のことをニートといいますので、ちょっと日本での使い方とは違うんです。日本でニートというのは、若年無業者のうちの、何かややこしく書いておりますが、要は就職をしたいけれども、就職活動をしていない、または就職をしたくないという人達をニートと呼びます。なので、フリーターとか失業者というところとはまたちょっと違うんですね。

フリーターは、点々としますけど、一応仕事もしているということで、失業者というのは、就職をしたいけれども、仕事がなくなってしまったということで、ニートというのは就職もしたくない、また、就職活動もしていないというような人達をいいます。

ニートも今、増えているということで、ちょっとお手元の資料では非常に小さくて申しわけないんですけれども、今、大体６３万人ぐらいいるそうです。１０年前から比べますと、かなり増えています。２０万人ぐらい増えています。年齢別で見ていただきますと、２０代の前半後半、

３０代の前半の方達までだと大体同じぐらいの人数がニートということで、十七、八万人という人数がおります。求職活動をしない、できないでいるというところで、非常に小さくて申しわけないんですが、病気やけがのためというのが一番多いんですけれども、やはり知識や能力に自信がないからというのが次の理由として多いんです。何か自信がないからということが求職活動をしない理由の中でも大きな位置を占めているということが言えると思います。

こういったいろんな現象が今起きているわけなんです。先ほども言いましたように、いい方向で使えばネットもすごく便利なものなんですけれども、やはり使い方を間違えると、本当に健康を害するような、そういった問題まで出てくるところまで。若いので、制限がわからず、のめり込んでしまうという部分があると思うんですが、そういった危険ももちろんはらんでいるということで、じゃ、周りの大人達がそこにどういうふうに関わっていくか、どうするかということが次のお話になってくるんです。

後半は、それでは、私達が子ども達とどういうふうに関わっていけるのかというところなんですが、皆さんいろんな活動をされていらっしゃると思うんですけれども、それの、ちょっと振り返り的なこともあります。子ども達の成長というところを見る図なんですけれども、子どもが経験を通して築く「自の世界」を真ん中の中心部分にいたしますと、自分の世界が外の輪にどんどん広がっていって子どもが成長していくというふうになるわけなんです。その成長していく中に、左の赤いところですね。「中間領域＝学びの世界」ということで、新しい世界を知るためには、やはり案内人、誰かガイドをしてくれる人が必要ではないかということです。ガイドさんがいて、無限にいろんな学びや遊び、交流、伝統、地域ということを知っていく。親や学校の先生達もこの中には入ると思うんですけれども、そういった学校や家庭ではないところで、いろんな遊びだったり、学び、交流、また、伝統・文化などは、意外と地域の中で新しく知って広がっていくということが結構あるのではないかと思います。

「ガイド」としての大人の役割というところでもう少し細かく見ていきますと、大人の中でどんな種類の大人がいるかというところで、まず、「自の世界」の付添人、世話をする人としての大人。これはお母さんやお父さんや世話をしてくれる大人ですね。次の「中間領域」のガイド、育成する人としての大人という人達が、けん玉をやるのに、地域でけん玉名人の人がいて、けん玉を教えてもらったりとか、そういったような感じのことです。それから、「他の世界」の代理人という、見守る人としての大人。これは別に何かを教えてくれるわけではないんですけれども、例えばプールの監視員みたいな人ですね。特に教えるわけではないんですが、子ども達の安全と安心を見守るということで、見守るだけの大人というような役割があるのではないかと。世話をする人が家庭で、

下のほうに来るほど外の世界、地域というような形で延びのラインがありますが、そういった分担と連携で、こういったいろんな役割の大人の人達がいて、みんな地域で育てるということが必要ではないかというお話になります。

また、別の形の分類なんですけれども、社会関係の３種類という中で、大人が将来の人間関係のモデルになっていくんだというお話なんです。

まず、「他」人と、「他」者と、「他」己という分類をさせていただいていますが、他人というのは、知らないけど、関わらない。なので、通勤電車に乗って隣に立っている人とかですと、知らないし、関わらない。変に関わると、何か怪しい人に思われますし、ちょっと隣にかっこいい人が立っていても、そこでいきなり声をかけたらやっぱり変な人と思われるという感じですよね。知らないから、関わらない人。それから、他者というのは、知らないけど、関わる人。これは例えばコンビニの店員さんみたいな感じの方達で、知らない人ですけれども、レジで幾らですかとやってもらって、「レンジであたためますか。」「お願いします。」とか言って、一応関わってはいますよね。でも、その人のことは知らないわけです。知らないけど、関わるというような、他者というようなことがまずあります。それから、他己。これは知っているけど、関わる。

家族ですね。知っているから、関わる。ということで、知らないという場合はそこでルールや規範性というのが必要で、関わるという方向で来ると、今度は親密さや共同性というものが出てまいります。こういった知らないルールと知っている親密さという、うまく両方があるということで、社会性が子ども達も身についてくるというようなことになるんですけれども、今現在、さっき言いましたのはＳＮＳとかそういったメディアの技術革新によってコミュニケーションの構造が変容しておりまして、他者という、真ん中ですね。子ども達の場合、知らないけど、関わるという人達が結構いなくなっているんです。

例えば､携帯電話などで電話をすることがもうほとんどですけれども、私なんかもまだ子どものころは携帯はなくて、家電でしたので、ちょっとお友だちに電話をしようと思ったら一応、「〇〇ですけれども」と言って、絶対お父さんとかお母さんとかがまず出られて、そこで「私は〇〇ちゃんのクラスの友だちで、ちょっと宿題のことを聞きたいんですけど、いますか」というようなことを一回しゃべらないと、本人に電話ができなかったわけなんですけれども、今はもう直接携帯で、「ああ、〇〇ちゃん」って、いきなり出ますよね。そういったようなことでも、何か今までだったらその人を介して次のところにというような､間に入る、知らないけど関わるというような人達がどんどん生活の中から排除されている環境になってしまっているということはあるわけなんです。

なので、若者達はあえて関わるのが苦手になっています。例えば、旅行に行くとして、旅館に泊まるか、ホテルに泊まるかとなったときですと、きっと若者達は、ああ、もうホテルに泊まるというようになると思うんです。旅館ですと、いわゆる仲居さんとかがいらっしゃって、もち

ろん知らないけれども、初めて会うのに、「ああ、どうも」って、知らない人に御飯をよそってもらったりとか、お風呂に行って帰ってきたら、知らない人に布団を敷いてもらっていたりとか、そういった関わりをしなくちゃいけなくて、そういう人達とも話さなきゃいけない。でも、例えば次の日が雨で、予定をしていて行きたかったところが雨で行けなかったというような場合は、そういった仲居さんなんかにちょっとお話をすると、「ああ、じゃ、ここへ行ったらいいんじゃないですか」と本当はいろいろ教えてくれたりするわけで、知らないけど、うまく関わることができるというような、そういった関係を非常に苦手ということで、若者達はどんどんそういう他者と関わるということが非常に少なくなっているわけなんです。

最初にちょっとお話ししました、他者と出会うということが、新しい学び、新しい世界につながっていくという。なので、いろんな他者の方達と出会うことで子ども達の豊かないろんな学びにつながるんですが、他者とつながっていかないのを嫌っているので、どんどん衰退していくという部分もあって、ネットとかそっちのほうの世界だけになっていっているのではないかというふうにも思われます。

他者の特徴というのは、ほかの世界へガイドをしてくれる人なので、知らないけれども、自分の世界を守って、関わってくれる人なので、ルールと親密、こわさとやさしさと、距離も置いているけど、でも、ある面では近いという両面を同時に持っているような人のことを他者といいます。なので、わりと子どもにとっては、「何かあのおじさん、変だな」とか、「あのおばさん、ちょっと変わっているよね」みたいな感じの大人がわりと子ども達は好きなんじゃないかなという。わりと子どもと一緒に遊んでくれたりして、へえーっと子どもに思わせたりとか、それが親でも先生でもお友だちでもない、別の大人が必要ということなんですね。

そういったことで、子どもをサポートするというスタンスとしては、世話や育成や見守りという３種類の大人が必要で、これがやがて社会関係のモデルとなり、また、成長を直接支える他者との体験というのを子ども達に豊かに与える、地域からの教育参画の意味があるのではないかと。また、現代社会では、まとめですけど、子ども達の育成する大人、他者というのが、非常に体験が貧窮しているということなので、子どもの支援には近さと遠さの両面を同時に持っていくという必要があるということになります。

じゃ、大人にとって子ども支援に関わる意味というのがどうなんだろうと考えますと、大人にとっても実は子どもと関わることで非常に学びにもなるということもあると思います。大人同士もさまざまなつながりを持つこともできますし、それが自分自身の生きがいにもつながっていったり、また、子どもの成長を見ることで自分も成長させてくれる、逆に子どもが自分にとっての他者ということにもなり得る。こういった子どもを支えていくということで地域のコミュニティーが活性化して、非

常に住みやすい環境を自分達で整備をしていくということにつながっていくのではないかというようなことがございます。例えばとありますけれども、子ども、また高齢者にとっては、地域というのは特別な意味があって、いろいろな資源。地域資源。人もそうですし、いろいろな場所だったり、自然だったり、いろんな地域の資産があると思うんですけれども、そういったものをどうやって子ども達に伝えていくかというのは他者である大人の役割ということで、それも大人にとっても非常に学びになっていくのではないかということですね。

これがこのような子どものつながりということで、地域のつながり。大人同士、大人と子ども、子ども同士というようなことで、大人同士も、大人と子どもも、子ども同士もいろんな地域のつながりが出てくるということで、いろんな子ども達と一緒に活動をサポートしていくというような地域になっていけば非常に豊かな地域になっていくのではないかと思います。

なので、ＳＮＳとかニートという現象も今、起こってはいるんです。これは後半、皆様でお話をしていただきたいと思うんですけれども、どうやって大人達がそういった子ども達に関わっていくか、関わっていけるきっかけというのがどういったことでできるのかというのが課題になってくるとは思うんです。小金井の地域性ですと、やはりまだ家庭とか学校のほうで非常に活動はもちろんしていると思うんですが、まだ社会教育の中での子ども達との関わりというのはまだまだもっともっと関われるんじゃないかと実は私は思っています。

その中で、私どものＮＰＯも、子ども中心に、地域の子どもは地域で育てるんだということを合い言葉に掲げまして、いろんな地域で大学の知を地域に生かして、そこの地域でみんなで育てていこうというようなことでいろいろ講座をやったり、イベントをやったり、そんなような活動もやっているんです。今、文科省のほうからですと、このサイトをまた見ていただければと思うんですが、「学校と地域でつくる学びの未来」ということで、土曜日の教育活動の推進ですとか、小金井でも放課後子ども教室をやっておりますし、あと、学校支援地域本部というのもございます。小金井のほうも今、学校支援地域本部も試行の段階で、これからというところだと思うんですが、このサイトを見ていただきますと、全国のいろんな事例が出ています。

放課後子ども教室も、小金井もやっておりますけれども、他地域でもこれが子ども教室なのというぐらいな活動をされていたりとか。例えば、毎日夏休みもずっとやっているという放課後子ども教室とかも実はあったりしまして、本当に地域の人がいっぱい入って、いろんな遊びを展開したり、そういった活動をされる放課後子ども教室もあります。

学校支援地域本部というのも今、中学校もあるんです。地域の大人達が学校の中に入って、授業のサポートをしているような人達もいますが、もちろん花壇の整理みたいなこととか図書の整理とか、そういったような環境整備をやっていらっしゃる方もいまして、すごくやっているとこ

ろだと、給食とかも地域の人達と一緒に食べたりとか。そういったようなところで、中学生とかになってくると、放課後の時間でどうやって地域の大人が関わろうかというと、何かイベントとかをやっても、中学生とか高校生って、なかなか集まってこないかなというのがあるとは思うんですけれども、そういった中で、でも今回、今日は図書館や公民館というような委員の方もいらっしゃるので、そういったところでもどうやって中学生とか高校生とかを生かしていけるだろう、来てもらえるだろうというようなことを多分いろいろ考えていらっしゃると思うんですけれども、学校の中に入ってしまって、学校支援で、逆に学校の中で関わるというようなこともあったりするわけで、いろいろな方法で大人から、中学生や高校生、小学生もですけれども、関わるきっかけというのを、今までですと自然に地域の中でそういった関わりができていたんですけれども、小金井はまだ子ども会ですとかそういった支援関係のものも残っているほうだとは思うんですけれども、でも、やはりなかなか子ども会活動とかも、お世話をする人がなかなか出てこなかったりということで、また、あえてそういった地域のつながりというのをつくっていかないと、なかなか関われなくなっているという現状もあると思うんです。

そういったところを今日お集まりの社会教育委員、それから図書館や公民館の委員の皆様とまた一緒に考えて、そういった子ども達と、まずは関わるというところをつくって、それからさらに一歩二歩とどうやって若者達と話していったり、みんなで地域ぐるみで育てていくというような小金井がつくれるのかというところをまた考えていけたらと思っております。ぜひこのサイトはまた見ていただければと思います。本当に全国の多彩ないろんな活動があるので、非常に参考になるかと思いますので、ぜひごらんください。

ということで、ちょっと足早ですが、私のほうのお話は終わりにさせていただきたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

藤井委員長　どうもありがとうございました。この後、大体１テーブルに４人で、グループ討議という形になるんですが、これは先生、どういうふうに進めていったらいいものですか。

小山田講師　とりあえず休憩をしていただいて、その間にグループでどなたか進行役をつくっていただいて、あと最後は発表していただきたいので、どなたでもと思うんですけれども、発表していただければということで、まず決めていただいて。まず前半の私のお話の感想とかをお話しいただいて、小金井の今の現状とか課題をお話しいただいて、次に、じゃ、自分達が何ができるんだろうというようなところまでお話しいただければと思うんです。

どうしましょうか。進行役はどなたでもいいんですが、各グループでじゃんけんで決めていただければと思います。休憩中に決めていただければと思います。

藤井委員長　わかりました。そうしたら、今、１０分前なので、ちょうど４時からグループ討議を始めましょうか。その休憩中に、進行係、最後の発表の

方を決めていただいて、今の感想だとか現状だとか今後の課題、どう思っているよとか、それから最後に、自分達だったらこういうことができるんじゃないのという形でまとめていただいて、大体３０分ぐらい時間をとりたいと思います。

それでは、１０分ほど休憩します。

（　休　　憩　）

⑵　グループ討議

藤井委員長　グループとしての結論は出ないのですが、共通の話題で皆さんで話し合う機会が持てたことがよかったかと思っています。グループで発表された話題について、発表してみます。ＬＩＮＥでつながったことが本当の友だちなのか、仲間はずれにされることを嫌がってつながっているのは、本来のつながりとは異なるのでは。

じゃ、私のところのグループの話でちょっと出てきたので紹介しておきますと、携帯の利用方法。これはもう今の現状ではどうしようもないと。スマホを買わないよと言っても、彼らはどこかでバイトしたり何とかして買うだろうと。ああいうのをやめさせるのは、小遣いの道を絶てばという話もあるんだけれども、それもなかなかできない状態だと。これは現状、このままで続けていって、子ども達が自分で気づいて、これは具合悪いなと子どもながらに感じてくれないと、もう方向転換できないねというのが本当の感想じゃないかとは思うんです。

それと、子ども達が、ＬＩＮＥでつながった友だち同士だという状態が本当の友だちなんですかということを、ある意味、子ども達が自覚してほしいなと。あの〇〇ちゃんとつながっていないといじめられるからとか、今度の誕生日パーティーに呼んでもらえないんだよねというようなレベルのつながり方は、子ども達にとってはつながっているのかもしれないけれども、これが本当のつながりなのかなということも出ていましたね。

それともう一つ、大きな問題になってくると、現状こうなっているのは、社会問題だとか家族問題だとか、こういうものが根っこのほうでこんがらかってしまって、現状、私達がどうしようもできないところから、じわりじわりと発生してきた問題も相当あるので、やっぱり気持ちとしては嫌なんだけれども、この状態がだらだら行くんじゃないのというのが私達のグループの感想でした。

こういうことを話し合えた３０分間はある意味では楽しい３０分間だと私は思いました。

あと、ありませんか。山田委員のところ、どうですか。

山田委員　うちは３人なんですけれども、雑談で終わりました。

それで、さっき出たようなＬＩＮＥでつながったとかそういう具体的な話はしなかったんですけれども、地域の人達との関わりということで、ある田舎のほうに行くと、子ども達がみんな知らない人にでも挨拶をすると。考えると、私なんかも子どものころはちょっと田舎にいたん

	ですけれども、知らない人にも学校から帰ってくるときは挨拶をするというのがありました。今は田舎のほうもどうかわかりませんけれども、多分都会のほうでは全くそういうことはないですね。 　それから、体験活動って、さっきパンフレットを配られて、そういうのも大切だということですけれども、子どもが塾通いとかいろいろあって忙しいからそんなことはできないんじゃないのというような話がありました。体験活動というのは、学業一点張りではなくて、発言された方は山の登り方と言われましたけれども、いろんな登り方があるので、そういうものも知っておく必要がある。それは大きくなってからはちょっと難しいところもあるので、小学校低学年ぐらいから体験活動を通じていろんなことを知っておいたほうがいいというような話が出ました。 　それから、ちょっとこれは私がいろんなことをやっているもので、先生も言っていたんですけれども、さっき話に出た学校支援本部。小金井では今、試行ということで、一小と三小と緑中でそういうのが行われているということで、そういうのが仲介というか、コーディネートしてくれれば、地域の人といろんな関わり合いもできるのではないかと思いました。 　それから、これも私なんですけれども、今、小学校５年生で稲の栽培をやっているんです。それの支援をやっているんですけれども、食育ということは大切だねという話も出て、あとは、昔は子ども達もよくできていたんですけれども、稲の束を縛ることができないとか、鎌は危ないから使っちゃいけないとか、あまり子どもにいろんなことをさせていないんじゃないかという話ですね。 　今はとにかく便利になったので、そういう昔みたいなことには戻れないんじゃないかというような、そういうことも出ました。以上です。
藤井委員長	それでは、次のグループ、お願いします。
原嶋委員	私のイメージとしましては、自尊感情や子どもの居場所、最後はメディア対応まで持ってきて、さあ、じゃ、私達が地域や子ども達のために何ができるかということを考えていたんですけど、ほとんど自己紹介とつぶやきということで大体終わってきました。 　皆様、いろいろ知見がある方なので、それぞれお話を伺った中で、まず小金井の子ども達の実態を知るということが大事なのではないか、本当に大きく変容しているんだよということを私も教わりました。私も小金井は長いんですけれども、確かに子ども達は、やさしい、おとなしい、お勉強が好き。好きかどうかわからないですけど、できる。だけど、今は随分変容しているんだな、そういうようなことの実態をもう少し把握しながらどう対応していいのかということを考える必要があるのかなと思います。 　また、これは行政的にいきますと、学校教育ですよね。先生方の多忙さ。自尊心なんかでいいますと、やっぱり先生方は一生懸命子ども達としゃべる時間があって、頑張ったねなんていう、そういう話の場面が少ないのかもしれません。もっと根本でいうと、家庭ですよね。塾だとか

部活とか遊びたいんだけど、でも、お母さんともしゃべりたい、お父さんともしゃべりたい。子ども達は本当に忙しい。そのときにふっと支えてくれる家庭、振り返る家庭がやや寂しいのかなという話も出てきました。

最後に、大学の先生がいらっしゃったものですから、小学校、中学校、高校、いろいろ悩みながら子ども達が育ってきている、その集大成というのはオーバーですけれども、大学に入る。どうも大学の実像も昔と随分変わってきているらしいです。入学式、卒業式は、お父さん、お母さん、おばあちゃん、おじいちゃんを動員してくるというような状態もあるし、身辺的自立という言葉なんですかね、そういったこともできていないのでは。つまり、自己責任をきちんととれない。昔でいう中学校、高校レベルのところが大学まで上がってきている。いろんな意味で、中学校、高校でいろんなことをおっしゃる方、実はそれも大学まで上がってきている。そんなことも話が出てきました。

私の当初の目論見が脆くも崩れまして、こういう形で、じゃ、我々はどうしたらいいか、その辺まではおよそ届いていないということです。以上です。

藤井委員長　ありがとうございました。それでは、最後のグループ、お願いできますか。

中村議長　社会教育委員の中村です。我々のグループでは、小山田さんのお話をお聞きして、まず前段部分のＳＮＳですね。それは後段の大人の役割を引き出すための導入ではなかったんじゃないかというお話が出ました。

それから、例えば地域の教育力アップということで、地域って、今、連携し過ぎても息苦しいのではないか、がんじがらめにし過ぎるのもよくないんじゃないかというお話も出ました。

それぞれ各委員の方々から個別のお話がありまして、ＳＮＳとかいろいろありましたけど、個別ではどんな実践をされているかというお話が出た中で、一つおもしろい実例がありましたのは、例えばご自分のお子さんをよその家に預けられて、そしてほかの家の大人はどうだというような体験を自分の子どもにさせてあげる、そういった価値観の多様性を認識させるような育て方をされている、ああ、なかなかすばらしいご家庭だなというふうな事例もございました。あるいは、ほかの意見としては、今、きたまちセンターがいろいろ頑張っていますね。社会教育に取り組んでおられる中で、マジョリティーというよりもマイノリティー。例えば子どもの中においてはひきこもりとか不登校、そういったマイノリティーへの温かな視線をもっと社会教育の現場、きたまちセンターなどで、そういった運営の方針の中でマイノリティーへの配慮をもっとしていく必要性もあるんじゃないかということがありました。

それから、大人の役割ということで、我々委員がどういった形で子どもの育ちに関われるのかということ、これは最後のまとめになると思うんですけれども、その中で、例えば学校運営協議会を設置しているコミュニティースクール、そういったところへの積極的な参加とか、そうい

ったことを心がけていってはどうかということです。それは例えば学校支援地域本部という、これも文部省が推進していますけれども、そういったところへできる限り時間をつくって我々大人が飛び込んでいって、地域の教育力アップのために何かできないかということが我々のグループでは話し合われました。

藤井委員長　どうもありがとうございました。最後のグループの発表が何か一番充実していたように私は思いました。ありがとうございました。

(3)　質疑応答

藤井委員長　それと、前段を通しての質疑というか、これだけは今日は聞いておきたいというものが何かありましたら。どなたかありませんか。話が大き過ぎてなかなかというところですかね。

じゃ、何もないようですから、私から、要は、一番理想的なスマホの使い方って、どういうようなものを想定されていますか。これが一番いいよというの、何かないですか。

小山田講師　一番いい使い方ですか。でも、大人は便利に使っていますよね。

藤井委員長　そう。大人は別問題としてね。

小山田講師　大人は便利に使っていますよね。だから、何かルールを決めたりとか。それは家庭内ですけど、時間とか制限するとか、ルールを決めていくというのが一つあるかと思うんです。でも今、変なサイトに行かないようにとか、そういうのは制限できるようにはなっているので、そういうのは多分お子さんには皆さんも言っていらっしゃると思うんですけれども、そういうのをもう一回ちゃんと見直してもらったりして、そういった制御みたいなものをやっていたりとか。だから、子ども達にも、便利に使えば便利なもので、でもどんな危険があるかということも教えていくという。それこそ時間がとれるかなんですけど、危険な面も教えていくというのも必要なのかと。その中で自分達が時間とかもそんなに長くやらないという中で、でも、実際に友だちとのやりとりで必要な部分もあるとは思うので、そのあたりを。だから、子どもとスマホだけにしないで、大人もどういうふうに使っているのかというのも見ていて、ちょっと危ないなと思ったら注意するような、見られるような関係になっていけばいいのかなとは思うんです。確かに便利だし、使うなと言えないようなぐらい、もう広まってはいるので、使い方をうまく。大人も見守りながら使えるような環境になっていけばいいのかなと思うんです。答えになっているのかどうかわかりませんが。

藤井委員長　要は、使う側の意識改革というんですかね、そういうことじゃないかとは思うんですけれども、やっぱり参考書とか授業とか自分のスケジュール管理だとか、そういうものがあの道具一つでできるので、使えば便利ですよ。ある意味、便利さだけを追求していくと、先ほどの例題にあったような問題になってしまうのかなと私も思うし、家族内で一緒に見るということも一つの方法。これは多分私達が子どもの時分、テレビができたときに、４人家族、５人家族で１台のテレビを見ていましたよね。

その中で同じ話題でしゃべったというようなことを考えてみると、幾らスマホが１人に１個じゃないんだけれども、ああいうものを中心に家族でしゃべっていくこと。今出ましたけれども、そういうのも、全部が全部じゃないけれども、一つの方法じゃないかということでしょうね。

小山田講師　はい。そうですね。

藤井委員長　ほか、何か特に。どうぞ、小島委員。

小島委員　公運営の小島と申します。先ほど中村委員のほうからも発表があったと思うんですけれども、公民館のほうに、もう何年も続けている講座で、子どもの人権講座というのがあるんです。それで、去年も「ＳＮＳと子ども達」というタイトルでやった部分もありまして、今年も自己肯定感をテーマにしたような連続講座を来年の５、６、７月ぐらいにやりますので、ぜひお時間がある方、市報に案内が出ると思いますので、聞きに来ていただけたらなと。ちょっと宣伝なんですけれども、公民館はやっているぞというアピールも含めてしたいと思います。よろしくお願いします。

藤井委員長　ほかに何かありますか。

田中委員長　図書館協議会の田中です。こんなことを言っていいかどうかちょっとわからないんですけれども、私、ＳＮＳとかそういったことはあまり詳しくわかりません。ガラケーというものを使っておりまして、つながっていないと本当に苦しかったり、つながっているがゆえに苦しいという学生もよく見てはいるんですけれども、それが小学生や中学生になった場合に、やっぱりすごく大変だなという気はいたします。

それで、それを与えたときに、そういうこともある、あるいはそういう痛みというか、苦しみというのもあるということを前提にしながら、そういうことはあるんだよということを伝えた上であなたにこれを与えると。困ったときは言ってもらわなくちゃ困るけれども、でも、それもあなたの責任というところがあるんじゃないのということをちょっと思ったんですね。つまり、誤った方向に行かないように行かないように、右に行ったら注意して、左に行ったら注意してと大人が先まわりして心配してやっていても、うまくいかないんじゃないかな。逆に、苦しい思いをしたり、嫌な思いをしたり、そういう体験から、次に強くなっていってほしいなと思うんです。そうしないと、そんなことがあると言うと、本当にあるのかななんて思っている。だから、言っちゃいけないかなとは思ったんですけれども、そういう苦しみとかも体験するということ。そういうことはしないほうがいいんだけど、そういうこともあるということを認めた上で渡してしまうというのであれば、大人も覚悟して与える。そうしないと、何かうまくいかないんじゃないかなというか、そんな気がしますね。

自分があまり子どもと向き合ってはいなかったんですけれども、忙しい中で、昔はそういうことはなかったから、遊びに行くと言えば子どももついてきたり、中学生ぐらいまではするんですけれども、山を登ったら苦しいとか、川に入ってもしかしたら溺れるかもしれないけど、そう

いう冒険をしないと、うまくいかないかなと思って。そこから逃げるだけでは何かうまくいかない。スポーツであると、けがするときもあるよということをわかった上でやるんだという。すみません、話がまとまらないんですけれども、いつもプラスだけの学びじゃなくて、マイナスもある。そういうことも踏まえた上で体験しながらやっていく。それを大人は覚悟して見ていくという。

最後は親が面倒を見るけど、それぐらいの覚悟でそういうものを与えないと。与えないというか、もうあるんですものね。そこからは出られないですよね。いいものがいっぱいあると思うんですよね。最近ＳＮＳとかいろんな情報はどんどん、私達よりもすぐやってくれますよね。「これ、わからないんだけど」と言ったら、ググるとか言って、ぱーっとやって、こんなことですよと出ますから、すごいことではあるんですけど、体験して、いいも悪いも含めて、それをやるのに大人も関わるというふうに感じました。すみません、まとまりがない話を。

藤井委員長　ありがとうございました。時間も迫ってきたんですけれども、どなたか、最後、質問ございませんか。山田委員。

山田委員　ＳＮＳを使う場合に、家庭内で話し合うとかという話が出たんですけれども、今、実際に家族で話し合うという時間が本当にどれだけあるのか。要するに、非常に豊かな時代になって、子ども部屋があって、例えば御飯を食べたらすぐに子ども部屋に行ってしまうとか、あとは家庭での教育というんですか、それを逃れてみんな学校の先生に押しつけてしまうというか、何でも学校に文句を言うということも聞くんですけれども、どういう傾向になっているのかなというのが。質問とも意見ともとれないようなことですが、以上です。

藤井委員長　じゃ、今日の講演会を最後にまとめていただけるそうですので、大きくまとめていただきたいと思います。

小山田講師　大きくはまとめられないんですけれども、今日は私のほうのお話をきっかけで皆様がいろいろお話をしていただけたということはとてもよかったのかなとは思います。本当にＳＮＳ等は便利なものではあるので、それをうまく便利なツールということで生かしていけるように、大人がどうやって子ども達に関わっていけるかという部分とも関係してくると思うので。本当に小金井の地域の皆様のすばらしい力って、私も住んでおりますけど、すごくあると思います。そういった皆さんのような地域の方々がこれからどうやって小金井の子ども達と関わっていって、豊かな小金井をさらに豊かな小金井にしていってくれる子ども達を育てていけるかというのは、みんなで協力しないとできない時代かなと思うので、家庭もですし、学校もですし、それから今、地域の力というのが非常に重要視されています。第三者の大人の関わりというのが。なので、そういったところで皆さんのお力をぜひ集約して、小金井の子ども達といろんな関わりが持てたらいいんじゃないかということで、まとめとさせていただきたいと思います。

藤井委員長　どうもありがとうございました。

２　報告事項

社会教育委員の会議議長　中村　彰宏　氏

藤井委員長　　次の議題ですけれども、報告事項が中村議長のほうからあります。

中村議長　　もう残り時間もわずかしかございませんので、手短にご報告させていただきます。今日の会議資料の中にございます２つの資料ですね。図書館協議会からの回答と公民館運営審議会からの回答。つまり、第二次小金井市生涯学習推進計画の評価に関わる調査ということでございます。時間をかけて検討していただいて、示唆に富んだ内容の評価をしていただきまして、本当にありがとうございました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

かいつまんで、ちょっとご説明させていただきますと、まず図書館協議会からのご回答についてなんですけれども、１ページ目の中段にございます第３節の第４項、施設の充実と有効活用の促進ということで、各委員からのご意見ということで、夜間貸し出し等について、これらの活動が書店を圧迫して、本・ＣＤ・ＤＶＤ等の売れ行きを鈍らせて、挙げ句には作家の生計をも危ういものにしてはいけないということだと。互いに共栄・共存できる方法、例えば新作には一部利用者負担金が生じるという形なども今後は検討されるべきなのかもしれないということで、受益者負担ということでお書きいただいています。実は市のほうでも受益者負担という流れは、一部の公共施設の利用について受益者負担という方向性が今、出ております。例えば貫井北町センターの施設の中に陶芸の電子窯があるんですね。そこの電子窯の使用というのは電気料が莫大にかかるということで、こういったものはやっぱり、私の個人的な意見ではありますけれども、受益者負担でなければならないんじゃないかということだったりもいたします。ちょっと余談になりました。

それから、同じところで、各委員からのご意見で、本の個人貸出が年々少しずつだが減少しているのが気になる、原因を調べる必要があると思う。これは非常に大事なことになっております。ぜひ調査して、今後の計画に生かしていただきたいと思います。

それから、第４節の連携・協働による施策の推進の中で、高齢化社会に対応して、保健所などとの連携も大事なことかと考える、高齢者にも読書に親しんでもらうと。非常に大事な視点だなと思いました。

それから、連携の中で、１ページ目の最後のところに、農工大学で実施されている大学図書館との連携を拡大していく、今年度は農学部との連携を行う予定である、学芸大、法政大学工学部との連携を模索する。これも非常に鋭いご指摘だなと思いました。

それから、次のページになりますが、各委員からのご意見という中で、第１節の第５項の枠の下のほうにありますが、これは第４章第４節とも関わってきます。学校と連携し、児童・生徒の図書館見学や職場体験を積極的に受け入れるとともに、図書館から学校に出向いて、利用案内やおはなし会等を行う。これは図書館と学校の連携ということで、こうい

ったことがどんどん促進されなければならないと思いますし、第３次生涯学習推進計画にぜひ盛り込んでいきたいなと思っています。

最後に、第２節のところで、鋭いご指摘がございました。高齢者の学習活動を支援するために、大型活字本の充実や資料の宅配サービスを実施する。これも非常に的確なご意見だと思いました。

図書館協議会の回答について若干コメントさせていただきました。

続きまして、公民館運営審議会からの回答をかいつまんでご説明申し上げます。

１ページ目の冒頭にございます、第３章、計画の基本理念についてということで、次期計画では「共に教え合い　学び合い　共に育ち　実感する喜びを!!　生涯学習のまちづくり」のような表現の検討をお願いしたいと。すばらしいキャッチフレーズだなと感心いたしました。ありがとうございます。

それから、第４章、施策の展開の中で、第１節の３、青少年の健全育成、遊び場・居場所の確保ということで、「青少年の居場所」「楽器練習スタジオ」について施策を展開する事業として次期計画では追加することが望ましいというご指摘をいただいています。

それから、一番下の段に第２節の１の(1)学習情報提供の充実ということで、現行計画では「各種自主サークル講座」や「市民が作る自主講座」が掲載されていないが、市民の自主活動の支援として位置づけ、施策の展開に追加されたいというご指摘をいただいています。

飛びまして、２の(3)高齢者の社会参加と自主活動の支援の中で、貫井北分館の高齢者学級を追加する、また、高齢者学級以外の公民館事業が掲載されていないところであるが、「将棋大会」「子ども囲碁教室」を加えてはいかがかというご指摘をいただいています。

それから、３の(1)高齢者と異世代の交流促進という中で、公民館の事業内容等、ぬくい少年・少女囲碁クラブ大会、異世代交流講座ということで、現行の延伸された計画で廃止（終了）となっている。飛びまして、また、異世代交流講座の参加者は少ないが内容を吟味すればもう少し増えるのではないか。鋭いご指摘だなと思いました。

飛びまして、３ページ目の第３節、１の(1)市民のための講座ということで、公民館の事業内容等、各種講座の中で、「各種講座」ではわかりにくいということで、「成人学校」「まちづくり講座」「陶芸入門講座」「庭木剪定講座」、企画実行委員が企画したものは事業名を明記するなど工夫が必要であるというご指摘です。同じトーンで、(2)も「各種講座」ではわかりにくいというご指摘がありました。

それから一番最後、(4)人権尊重と男女平等の意識づくりの中で、４ページ目に入りますけれども、現行計画では公民館事業の記載がない、人権尊重と男女平等の意識づくりは公民館はかなり熱心にやっているはずである、現在の市民がつくる自主講座のテーマだが、「子どもの人権講座」「男女共同参画講座」として記載すべきとご指摘を受けました。

それから、飛びまして、３の文化事業・イベントの推進、(4)イベン

トの活性化ですけれども、次期計画において親子映画鑑賞会の実施について検討をされたいということがございました。

そして、飛びまして、４ページの一番下、その他ということで、これは非常に鋭いご指摘ですが、全体を見るといろいろな担当（課）が入り乱れて、公民館でやるようなタイトルが他課の担当となっている例がある、また、公民館で実施しているにもかかわらず、事業の記載がないなど整理が必要である。これは第３次の計画に十分反映していきたいご指摘だと思います。

それから、飛びまして、下から４行目です。施策と事業の混在が見受けられるので、次期計画では改善されたいというご指摘がありました。

全般にわたって、これまでの評価もそうなんですが、第３次の策定に役立つようなたくさんのご意見を両委員会のほうからいただいています。本当にありがとうございました。

それから、公運審さんのほうからは、特に貫井北町センター絡みの事業を次期計画として盛り込んでいくようなご指摘をかなりいただいておりますので、それは第３次に反映させるような形で策定をしたいと思います。

第２次小金井市生涯学習推進計画の評価にかかわる調査についてご報告させていただきました。

それから、図書館協議会、そして公運審の方々、それぞれ興味がおありの件で、今、小金井市の東センターに図書館と公民館の施設がありますが、それをＮＰＯに委託する方向で行政のほうで動いておられるという中で、それと関連して、先般９月から１０月にかけて貫井北町センターの委託に関する評価を皆さんにしていただきました。その結果がまとまりました。これについては市のホームページにアップしてはおります。それと連動して、また、ＮＰＯへの委託ということで、東センターの図書館と公民館を業務委託する方向で動いておられるということで、昨日も東センターの利用者懇談会があって、この中にもご参加された方がいらっしゃると思いますので、一応動きとして、今、公民館と図書館がＮＰＯに委託ということで動いているというご認識をいただければと思います。

それから、雑件ですけれども、特に図書館協議会の方に関するところで、先般１１月１日、きたまちセンターで、ビブリオバトル、書評合戦のイベントがございました。これは公民館と図書館の共催事業ということで行われました。そして、その場にはこの中にいらっしゃる委員の方も私を含めて４名ご参加いただきました。非常に盛況で、８名の発表者、大学生４人、高校生４人ということで、それぞれ５分間の与えられた時間の中でお薦めの本を熱く語っておられました。そして、観客は３０名ぐらい集まりまして、それぞれの高校生部門、大学生部門で、一番自分が読みたいなと思った本を選んだわけです。非常に盛り上がった、いい会であったなと思います。ご関係いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

以上、ご報告とさせていただきます。

藤井委員長　　どうもありがとうございました。

３　次回日程について

藤井委員長　　それでは、最後ですけれども、平成２６年度は公民館が合同会議の事務局を担当しましたが、来年は図書館協議会のほうが事務局だと聞いております。来年度の日程その他は、もしここで発表いただけるなら、日程だけでもお願いできますか。

上石図書館長　　図書館長です。来年度、図書館が所管となりますので、よろしくお願いいたします。三者懇談会だけは日程を決めさせていただいております。来年の５月２１日（木）午後２時から、こちらの８０１会議室、同じ会場です。よろしくお願いいたします。

藤井委員長　　ありがとうございました。ちょっと時間をオーバーしてしまったんですけれども、本日は、社会教育委員の小山田委員のご好意を得て、有意義な基調講演にはじまり、皆さんの関心のあるテーマに関してかたい話、やわらかい話等入り混じってはいましたが、委員の方々の様々なご意見や、日頃の思いをお互いに話し合う良い機会となりました。

このような合同会議を開催いたしまして、担当の公運審司会進行としては、内容についてはある程度満足していただけたかと思います。本日はどうもありがとうございました。

+

地域住民として、子ども達とどう向き合うか ～現代の子ども達が抱える諸問題SNS・ニートetc～

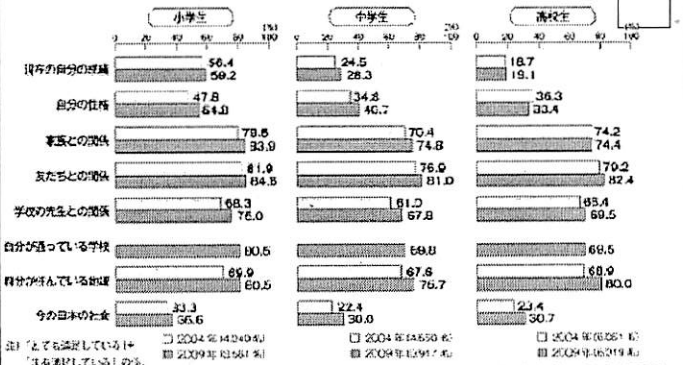
東京学芸大こども未来研究所
小山田　佳代

2014年11月14日

+

子どもたちの生活満足度

第2回ベネッセ子ども生活実態基本調査(2010)から

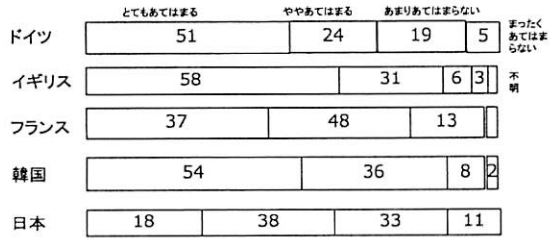


自尊感情の弱さが顕著

+

児童対象国際比較調査

5カ国の児童8歳以上13歳未満(韓国・日本は小学4～6年年生)対象。韓国1,200件、日本は5,300件、その他約500件



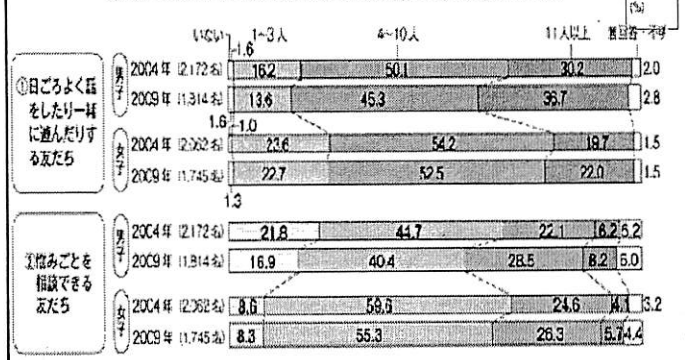
自分のことが好きである

「児童の放課後活動の国際比較2011年」福村出版より

+

友だちの数

第2回ベネッセ子ども生活実態基本調査(2010)から(以下同様)



友だちとの関わり

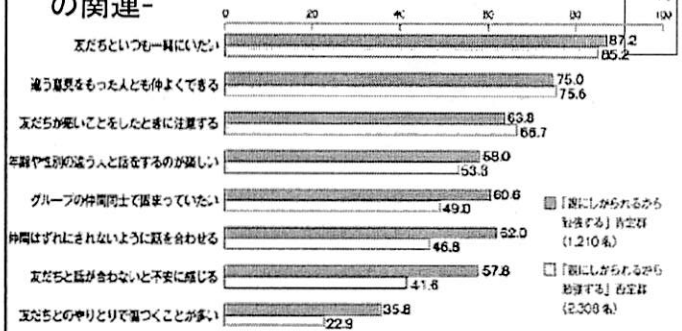
(%)

	小学生全体		男子		女子	
	2004年 (4,240名)	2009年 (3,561名)	2004年 (2,172名)	2009年 (1,814名)	2004年 (2,062名)	2009年 (1,745名)
友だちといつも一緒にいたい	81.8	85.3	77.9	< 82.9	86.1	87.9
違う意見をもった人とも仲よくできる	70.1	74.9	68.4	< 75.2	72.0	74.7
友だちが悪いことをしたときに注意する	60.0	< 65.3	57.0	62.2	62.4	< 68.5
年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい	53.2	54.5	47.2	49.8	59.0	59.6
グループの仲間同士で固まっていたい	46.2	< 52.5	47.4	< 56.7	45.0	48.3
仲間はずれにされないように話を合わせる	46.7	51.6	44.6	< 50.4	49.0	52.9
友だちと話が合わないと不安に感じる	46.9	47.0	42.2	44.5	51.9	49.4
友だちとのやりとりで傷つくことが多い	—	27.1	—	25.7	—	28.8

注1）「とてもそう」＋「ほぼそう」の%。
注2）＜＞は5ポイント以上差があることを示す。

「おとなしく群れる」=草食系男子像

ともだちとの関わり　-親への気配りとの関連-



注1）「成績が悪いと親にしかられるから」に「とてもそう」「ほぼそう」と回答した人を「親にしかられるから勉強する」肯定群、「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」と回答した人を「親にしかられるから勉強する」否定群とした。
注2）「とてもそう」＋「ほぼそう」の%。

主体性の弱さが顕著

高望みしない、という感性

●自分のプライドや自尊心を守るために、期待を低下させて満足度を高めたり、自分が置かれている状況を、自分よりも劣位の子の状況と比べて優越感（擬似満足度）を感じたりして、現状に対する満足度を高める傾向

出典「こどもにとって理想の支援者とは」/東京学芸大学　松田恵示教授より

子ども集団の変化

- こども集団の矮小化と「島宇宙化」

  →学級の中にこどもの集まりが分断されるとともに「序列化」が進んでいる

- 「序列化」の内容（引用元wikipedia http://ja.wikipedia.org/wiki）

・恋愛・性愛経験 - 豊富なほど上位

・容姿 - 恵まれているほど上位

・ファッションセンス - 優れているほど上位

・場の空気 - 読めたり支配できたりするほど上位

・部活 - 運動系（特にサッカー野球を始めとする球技）は上位
文化系は下位

・趣味・文化圏 - ヤンキー・ギャル系は上位、オタク系は下位

・自己像 - 自分探し系は上位、引きこもり系は下位

スクールカースト

- …コミュニケーション能力の有無に偏重したスクールカーストという序列が発生した背景には、学業成績の相対評価を廃止するなど生徒に対する序列付け自体を否定するような過剰な平等主義があり、「学業成績」「運動能力」といった（努力で挽回可能な）特性によるアイデンティティを失った子供たちは「人気（コミュニケーション能力）」という（努力で挽回不可能な）特性に依存した序列付けを発生させてしまった…

(和田秀樹 『なぜ若者はトイレで「ひとりランチ」をするのか』 祥伝社)

- スクールカーストによる階層化には地域差が存在
- 人間関係の流動性が低く閉鎖的な場（いざというときに逃げられない状況）で起こりやすい現象　　cf.塾/中学受験/選択制

出典「こどもにとって理想の支援者とは」/東京学芸大学　松田恵示教授より

スクールカーストの特徴

- スクールカーストでは、上位層・中位層・下位層をそれぞれ「一軍・二軍・三軍」「A・B・C」などと表現

「教室はたとえて言えば地雷原」

（土井隆義、「ゼロ年代の想像力」）

- カーストといじめの関係　→　大きい

上位から下位へ　下位カースト内で(離脱できない)

いじめることでカーストが上昇

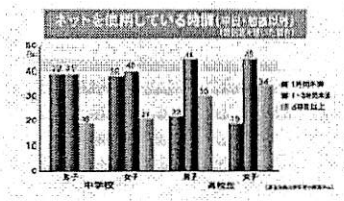
出典「こどもにとって理想の支援者とは」/東京学芸大学　松田恵示教授より

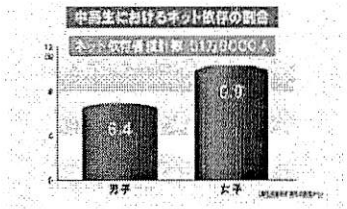
SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)

- インターネットの普及
  総務省の通信利用動向調査によると、平成23年末にネットを利用していた人は約9600万人で、これは国民のおよそ10人に8人にのぼる。
- Facebook　2004年　　世界で12億人(2014年3月末)

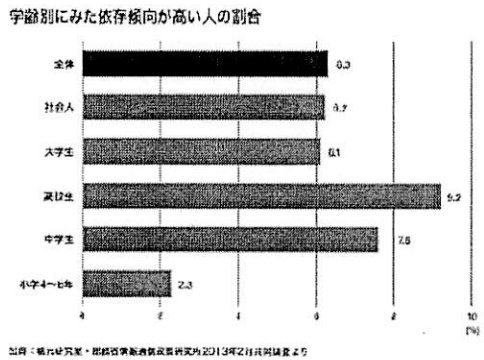
  実名登録プロフィールを公開して不特定多数へ発信
- Twitter　　2006年　1日あたりの投稿が5億件以上

  気軽に多様な人とつながっていける
- LINE　　2011年　世界で4億人以上、国内で5000万人。
  10代～20代のユーザーが多い。One To Oneのコミュニケーションツール。スタンプが人気。
- オンラインゲーム





ネット依存:
ネットの使い過ぎで、健康問題、社会問題、家族問題などを引き起こしている状況。その特徴として、ネットへの強いこだわり、ネット使用のコントロール障害、問題が生じていると知りながらネットを続ける、などが認められる。



ソーシャルメディアに没入する動機

- 孤独感が癒やされ、自分の心情や考えを多くの人に知ってもらえるという充足感

  「つながり」を求めて　→　「自分」が安定するために

  心理的なストレス解消

- アクセスしないと、親しいグループから仲間はずれにされたり、陰で悪口を言われたりするのではないか、という不安から

インターネット"はあくまでツール。ネットを介して広がる人間関係や、引き出せる情報、最新のゲームや動画に興味をもって使えば、便利なツールである。

ネット依存が引き起こす問題

- **健康関連**

  睡眠、覚醒の問題、栄養失調

  メタボ、骨がもろくなる、体力の低下

- **学業など**

  成績低下、遅刻や欠席が増える、

  金銭問題、補導　など

不登校、引きこもり等にもつながっていく

「ニート」の現状

- 「not in education, employment or training」という部分の頭文字を取り、「NEET」と略したものが始まりである。イギリスにおける「NEET」とは、教育、雇用、職業訓練のいずれにも参加していない16～18歳の若者

- 日本で「ニート」とは若年無業者のうち「非求職型および非希望型」、つまり「就職したいが就職活動していない」または「就職したくない」者である。

  フリーターや失業者とは異なる。

厚生労働省の定義による若年無業者（ニート）の推移（単位：万人）

年	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
推計	40	42	45	40	42	46	48	44	49	64	64	64	64	62	62	64	63	60	61	63

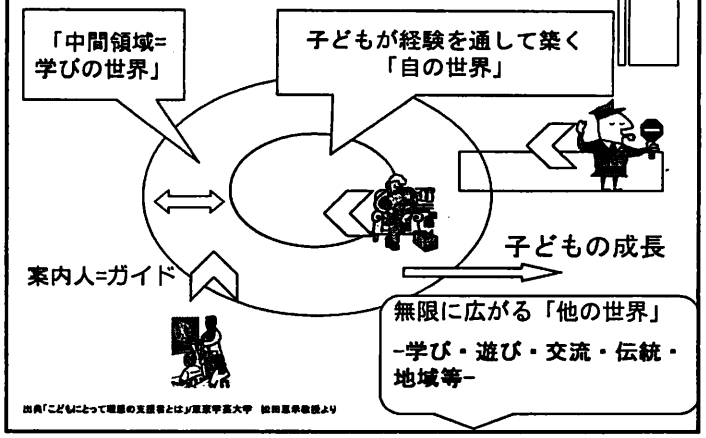
求職活動をしない（できない）理由

年齢別（5歳階級、単位：万人）

年	年齢 15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳
2008	9	16	18	19
2009	10	16	18	18
2010	9	15	17	17
2011	9	15	18	19
2012	9	17	18	18

資料出所：総務省統計局「労働力調査（基本集計）」
資料出所：2010年12月3日付・厚生労働省
職業能力開発局 キャリア形成支援室
「勤労青少年を取り巻く現状について」

「育ち」は「出会い」



出典「こどもにとって環境の支援者とは」/東京学芸大学　松田恵示教授より

「ガイド」としての大人の役割

- 「自の世界」の付添人
  →「世話」する人としての大人
- 「中間領域」のガイド
  →「育成」する人としての大人
- 「他の世界」の代理人
  →「見守」る人としての大人

←家庭
←地域・学校
←地域

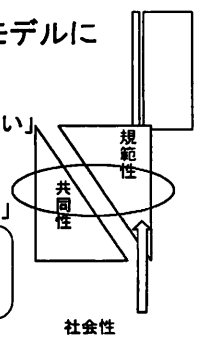
分担と連携 … 子どもは「みんな=地域総がかり（家庭+学校+地域）」で育てる必要あり

出典「こどもにとって環境の支援者とは」/東京学芸大学　松田恵示教授より

地域の大人が将来の人間関係モデルに

- 社会関係の3種類
  「他」人 … 「知らない」「関わらない」
  「他」者 … 「知らない」「関わる」
  「他」己 … 「知っている」「関わる」

「知らない」→「ルール」…「規範性」
「関わる」 →「親密さ」 …「共同性」



●メディアの技術革新によるコミュニケーション構造変容など社会環境の変化大きい →他者を排除する環境へ

他者との出会いの貧困と「学びの世界」の衰退

出典「こどもにとって環境の支援者とは」/東京学芸大学　松田恵示教授より

「育成する大人」=他者の特徴は?

- 「育成する大人」=「他の世界」へガイドしてくれる人
  =「知らない人」
- 「育成する大人」=「自の世界」を守ってくれる人
  =「関わる人」

つまり、「育成する大人」=「知らないけど関わる人」=「ルールと親密さ/こわさとやさしさ/距離と親しさ/遠さと近さ」の両面を同時に持っている人のこと

例、「へんな人」が大好きな子どもたち
→「へえっー」と言わせることのできる大人の存在
→「親」でも「先生」でも「友だち」でもない大人

出典「こどもにとって理想の支援者とは」/東京学芸大学　松田恵示教授より

こども支援のスタンスとは?

- 子どもの成長には、「世話」「育成」「見守」の三種類の大人が必要
- それはやがて社会関係のモデルとなる
- 成長を直接支える「育成する大人」=「他者」体験をこどもたちに豊かに与えるのが地域からの「教育参画」の意味
- 現代社会では、こどもたちの「育成する大人」=「他者」体験は貧困
- 「こども支援」は「近さと遠さ」の両面を同時に持つ必要がある

出典「こどもにとって理想の支援者とは」/東京学芸大学　松田恵示教授より

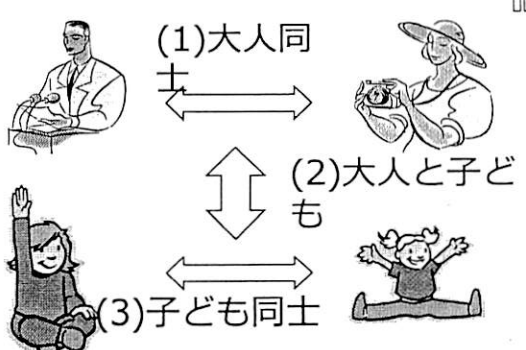
「大人」にとって子ども支援に関わる意味

- 「こども支援」を通じて、大人も様々な「つながり」を持つことができる。このことが自分自身の「生きがい」につながる
- 大人にとっても子どもは自分を「成長」させてくれる「他者」となりうる。生涯学習
- このような「こども支援」を通じて、地域のコミュニティが活性化し、住みやすい環境を自分たちで整備することに繋がる

cf.　子どもと高齢者にとっての「地域」の特別な意味

発達資産としての「地域」の意味

大人自身の「生きがい」と「こども支援」を通した地域での「つながり」



出典「こどもにとって理想の支援者とは」/東京学芸大学　松田恵示教授より

地域の子どもは地域ぐるみで育てよう

- 土曜日の教育活動の推進
- 放課後子供教室
- 学校支援地域本部

文部科学省　学校と地域でつくる学びの未来

http://manabi-mirai.mext.go.jp/